

被災地派遣を経験して ～ 私たちにできること ～

盛岡市上下水道局総務経営課 山路 聡

衝撃的だった。陸前高田市の被害を目の当たりにして私は茫然とした。この惨状に自然と涙が流れ落ちたことを憶えている。

4月18日、岩手県の実務により陸前高田市水道事業所に赴任した。任期は6月末までの2ヵ月半である。

市役所は津波にのみ込まれてしまったので、高田町鳴石団地の公園内にプレハブの仮庁舎が設置されていた。水道事業所は3坪程度のハウス1棟に12人がひしめいている状況だった。避難所から出勤している職員も多く、震災直後の彼らは朝5時に起床し、支援物資の運搬を行ったあと8時半から水道復旧作業に従事、そして18時から深夜までまた支援物資の運搬を行うという過酷な毎日を過ごしていたという。寝る場所も冷たいコンクリートの叩きに段ボールを敷いただけであり疲れなどとれるわけがない。全てを失ったこの頃がもっとも将来に不安を感じていたと後で話してくれた。

私が赴任した頃は閉庁日がなく、出勤簿や時間外などの管理も全くされていない状態で、みな無理をして働いていた。また、職員が避難所で休んでいると「職員が寝ている」と後ろ指を指されるような気がするので出勤していたほうが楽と話し、震災以降全く休んでいない職員もいた。それでも心身の疲労は表情に現れ、早く仮設住宅への入居がかなってほしいと私は願うばかりだった。

このような状況でも、被災地の職員は派遣職員に対して、「私たちのために申し訳ない。休みなど通常どおり取って欲しい。」と話した。温かく感じたが、私はこの遠慮という壁を取り除かなくては一丸となって復旧に取り組むことができない

と考え、手始めに応急復旧プランとスケジュールを作成した。これにより水が出るまでのイメージと目標が共有され、心をひとつにすることでその壁を払拭していくことができたと感じている。

水道施設の復旧にあたっては、大阪市水道局と神戸市水道局に人的支援をいただいた。しかしながら遠距離であるため8日間で全員が次の職員に交代となり、引継ぎが十分に行われてはいても、日を重ねるごとに情報が煩雑になるという問題が起きた。そこで、大阪市水道局と神戸市水道局にはプレーヤーとして技術や経験を発揮していただき、私たちは進捗状況や情報を管理するマネージャーに徹することで役割を明確にした。私はこの方策が功を奏し5月10日に通水開始、6月26日に市内全域通水という結果につながったと思っている。給水可能エリアが拡大するたびに業務は忙しくなるが、職員の表情が日々明るくなっていくのを感じた。陸前高田市では水源や管路などの水道施設全般を熟知している職員が少なく、「自分たちだけでは無理だった。きっと全国の水道の仲間が助けてくれると信じていた。」と私に話してくれた。

今回の震災による陸前高田市職員の死者・行方不明者は、295人のうち68人で全体の4分の1に相当する。生存している職員の中にも家族や自宅を失った人が大勢いる。これでは通常の業務処理に支障が出るばかりか、被災地が完全復興するには相当な歳月がかかると思う。その中で私たちにできることは、今後も継続して必要な支援活動を行っていくことであると強く感じた。今では私にとっての第二の故郷であり、個人的には今後もできる限りの応援をし続けていく思いである。